

私の求める幼児教育



金 沢 嘉 市

私が求める幼児教育というのは、私自身が、幼児教育の専門家であったわけでもありませんけれども、長い間小学校の教師として、子どもたちを幼稚園あるいは保育園から、あるいはどこにも行っていないかった子どもたちを、迎えておる側です。その受け入れ側の立場から、考えを申してみたいと思います。

◆ 教育とは

最近教育とは何ぞや、ということが各方面で問われています。中央教育審議会は、あのような答申を出して、今後の日本教育の改革すべき点は何であるか、という構想を発表しました。それに対して、政界も経済界も、教育界もそれぞれの見解を出しております。なぜ教育が、そんなに問われているかということ

ですが、私が思いますには、政治が実は今、混迷状態にはいつてしまっています。中国承認問題、今後の中国と、いかにわれわれは国際関係を結んでゆくかということについても、出おわれてしまった日本として、どうすべきかという、この辺が一つの混迷状況にはいつていると思えますし、それからあるいはまた、経済においても、公害が出てまいりまして、そして今まで通りにはいかないこと、今後の経済はどういうふうにしなければならんかということについても、混沌としています。

そして住民パワーと申しますか、もう住民は黙っていない。公害にあえば、昔だったならば、国の富がふえるならば、お国のためならば多少の犠牲はやむを得ないといわれれば、やむなくひきさがったものですが、もうそうではありません。私たち

の権利がそこなわれてたまるものか、というようなことから、
あちらでもこちらでもいろいろな問題がおきているのですが、
私はそれを見て、まことにけっこうであると思っております。

つまり市民意識というものが、やっと戦後二十五年、六年にし
て芽ばえてきたと、そういうふうにも思われるわけでありませ

そういうふうなことから、これからの教育はどうすべきか
ということ、かなりいろいろな問題をおこしているわけです。
そこで私は、教育とは何ぞやともし問われるならば、非常に大
それたもののいい方をしてしまうわけですが、私の長い体験の
上からいえることは、「教育とはすべての人間が、人間らしく
生きてゆくための、生命力を育てることである」とこんなふう
にいつてみたいのです。

すべての人間が、人間らしくということは、誰も彼もこの世
に生まれてきて、本当に望みたいことは、人間らしく生きたい、
ということではないかと思えます。公害のない住みよい所で、
そして戦争もなく、この世に生まれてきた我々の命というもの
が大事にされて、ひとりひとりが生きたいのある生活をしてゆ
きたいということ、これを望まない人はないと思えます。まさ
にこれは、世界中の人がそう望んでいると思うのです。

さきほどいきました公害についての問題も、あるいはまたア
メリカでは、反戦運動が二年ぐらい前からおきております。こ

の反戦運動も昨年あたりは、一千万に及ぶ人が反戦運動をおこ
している。この反戦運動のリーダーになっている一人が、スポ
ック博士であります。スポック博士は、「私はイデオロギーの
問題でなくて、小児科の医者として、また心理学者として子ど
もたちのことを考えてきた。その私の子どもたちを考え、大事
にしてゆきたいという一つの願いが、無残にも戦争によつても
ぎとられてしまう。あの若者たちが、あのような戦いに出かけ
てゆく。そしてまた戦場においては、全く罪もない子どもや女
の人々が殺されてゆくということは、とても耐えられない。こ
んな戦争はやめてもらいたい」ということから、あの人は立ち
上がっておられるわけですが、全くその心境は私にもよくわか
るのであります。

ここに人間が、人間らしく生きたいということは、人類の願
いであると思えます。そういうことから、教育においては、
どうしてもこの問題を一つ、大事な柱としてすえなければなり
ません。人間の尊厳が十分に守られなければならないというこ
と。次に「すべての人間が」とそれにはつきたいのです。不幸
にしてからだが不自由で、不自由な生まれ方をしてきた人もあ
る。不幸にして知能が遅れた生まれ方をした人もある。不幸に
して不遇な生活をしなければならぬという、子どもながらそう
いう目にあいながら育ってきた者もあるとするならば、そうい

う者たちこそまず第一に、人間らしく大事にされなければならぬ。そして、誰も彼も皆人間として、大事にされるといふことを願いたいのであります。そしてそこにもう一つ、すべての人間が平等に人間らしく生きてゆくための、生命力を育てたいということなのです。

この生命力というのは、私自身も非常に積極的な意味をもっており、実は数年前に、私の所には初めて孫が生まれ、病院に初孫を見にまいりました。すると看護婦さんが、孫を白い着物に包んで連れてきました。ガラスのドアの所まできますと、看護婦さんは立止まって、私にどうぞ中へおはいりなさいともいわなければ、自分からドアを開けて外へも出ない。ガラス越しに赤ん坊を抱いたまま、私の方を見ながら、ほらおじいちゃんよ、とこう見せるわけです。私はそれまで、「どんなことがあってもおじいちゃんと呼ばせてはならないぞ。まだ若いんだから」と息子夫婦にきびしくいつていたのです。けれども看護婦さんが、やすやすとそういつちやっただけです。しかし私は「まあいいわい。この子におじいちゃんといわれるならば、いくらいいわい」ともうそれで私の固き信念も、一度にくずれてしまったわけです。ところが看護婦さんは、私にゆっくり初孫を見せてくれればよいものを、二分か三分見せたら「もういいでしょう」といいながらまたすたすたと向う

へ連れて行っちゃった。仕方がないので私は手もち無沙汰というか、目もち無沙汰といっているのかほんやりしていると、そのガラス越しに見えたのが未熟児の赤ちゃんです。未熟児の赤ちゃんが、ガラスの箱にはいって数人寝ておるのを見たのです。初めて私が見た未熟児の赤ちゃんです。よく見ておりますと、その赤ちゃんが呼吸をし、そして心臓の鼓動が、よく見えるのです。なおもよく見ておりますと、心臓が、どきどきと鼓動を打っているなどというのではなく、まさに全身です、生きるんだ生きるんだというように見えるし、全身で、生きてるぞ生きてるぞと、全身で鼓動を打っているという、私は感じを受けたのです。その時、ああこれが生命力というものである、初めて私は感じたわけです。

“生命力”ということを含んで使ってきましたが、それは全く私には、空虚な言葉であったわけです。けれどもその時に、初めて生命力、人間の生命力というものを見て、まさに圧倒されてしまったわけです。この、内に内在する生命力があるからこそ、人間は生きてゆくのだということを知ったのです。母乳を飲み、食物を食べて人間は生きてゆくとのみ思っていた私が、ここに大きな発見をしたわけです。教育というものは、このような生命力をみごとに育て上げてゆくものである。とこういふふうに思いたいのです。したがって勉強ができない子どもであ

るならば、その勉強のできない子どもを、この子は勉強がこの程度しかできないからというのではなくて、この子は勉強ができないからできるようにして、彼のもっている内在する生命力をいかに開花させるかということが教育であると、こういうふうに認識するわけであります。

また、人間が人間らしく生きてゆくための生命力というからには、もしも人間らしく生きられないようなこと、そういう抑圧や、疎外をされることがあるならば、あえてそれに抵抗する。

こういう人間でなければならぬと思います。またすべての人間が人間らしくというからには、自分でなくて他の誰かが、人間らしく生きられないように疎外されているとしたならば、それも黙っていられない。そういう社会は決していいとはいわれないうえです。誰も彼もが幸せに、人間らしく生きられる社会にするため、そういうことにいろいろな抑圧や、疎外が行なわれているとしたならば、その人の身にもなって、共に戦ってゆくということ、そういう意味の、社会をよくするためへの生命力というものを内在させてゆくということ、それを育ててゆくということが教育であると、私はこういうふうに理解するわけであります。

しかも私の、すべての人々が差別されることなくというその言葉の基本には、私だけのことではなくて、幸いにして日本国

憲法の第二十六条に、「すべて国民は法律の定める所により、能力に応じて等しく教育を受ける権利を有す」という言葉があります。この教育を受ける権利というのは「よい教育を受ける権利を有す」そういうことになるわけです。しかも国民の中のとりのわけ子どもたちは、この世に生きてきて、ただ飯を食べて生きてゆくだけでは、人間らしい生き方はできません。子どもにはどうしてもおとな以上に教育という営みをしなければなりません。その点からも、子どもは等しく誰も彼も、能力に応じて、よい教育を受ける権利を有すと、いえるわけです。

ここにいう能力に応じてというのは、この子は一の能力しか無いから、だから一の学校に入れる、というのではないのです。その彼がもし一であるならば、いかにして彼を二にし、三にし、四にし五にし、六にし七にするかという、これを教育という営みによって、花を開かせてやるということが、これが教育であるわけです。私は自分の教育信条として、人間にくずは無い。必ずどこかによい所がある。その長所天分を伸ばし、花を開かせて、実を結ばせてやること、それをつかさどるのが教育の仕事であるところいうふうに考えています。私はこの憲法の精神の能力ということについても、そのように人間の可能性を信じてゆきたいと思うわけです。

これは、能力主義的な、今の中央教育審議会が考えている能

力適性に応じてという言葉とは大変な違いです。あれは能力に応じて、能力別学級を作ったり、能力適性に応じて、中学卒業十五歳の年齢のところ、君は農業学校、君は商業学校というふうに、コースを分けようとするわけです。十五歳の年齢でそう簡単に人間が分けられるものではないと、私は思っています。が、とにかく私は、人間の可能性を信じて、それを育ててゆくということが教育である。できない子どもであればこそ、からだの不自由な子どもであればこそ、精神薄弱児の子どもであればこそ、貧困な子どもであればこそ、その子たちが優先的に大事にされなければならない。こうしてすべての子どもたちが、本当に生き生きとした教育が受けられひとりひとりの可能性を十分伸ばすようにしてやらなければならぬという、これが私のまず教育に対する基本的な考えでございます。

◆ 乳児期、幼児期を充実させる

幼児教育はどうするか。それについてはまず順序として、乳児、幼児、少年期、青年期というふうに人間は発達してゆくわけですが、その時は、乳児期は乳児期として、幼児期は幼児期として、少年期は少年期として、青年期は青年期として充実させてやること、それが実は人間の全面発育の上に重要なことでもあります。

ところが今日は皆さん、どうでしょう。それぞれの時期が充実されているでしょうか。まさに背伸びの状況じゃありませんか。赤ちゃんが生まれる。一番いいのは母乳です。何といっても母乳です。母乳で育てなければならぬのに手軽にすぐに、人工栄養に切り替えてしまう。もちろん、母乳の出ない人や働いておられる方は、やむを得ませんよ。ここに問題があると思います。あの母乳を飲ませる時は、母親にとっては一番辛いな時です、母性として。また、赤ちゃんも母親の膝の上でいい気持ちでお乳を飲んでる。飲んでしまえば、休んだりまた飲んだりしながら母親の顔を見る。おかあさんがそこで「もういいの」とか、「太郎ちゃん」とか、「花子ちゃん」とか呼ぶ。と子どもはその時、にこっと母親の顔を見る。でおかあさんはにこっとして子どもに何とかいう。子どもはおかあさんが、何とやっているのか意味はわからないけれども、母親の言葉の中には愛情がいっぱいこもっているわけです。ここから親子の人間の交流が行なわれるわけでありまして。これがまさに大事なことであるのに簡単に人工授乳にしてしまう。ひどい人は仰向けに寝かせておいて、哺乳瓶をくわえさせる。そして飲んでしまったら、ぽっと抜いて「もういいの」なんてやってる。これじゃもう、全然人間的な交流はないわけです。はだかふれ合っていないません。私が母乳がいいという理由の一つとして、親が抱い

て飲ませること。この話を、ある大学の保育科で話しましたところ、その席に内藤寿七郎先生の代理の方がいらして、今、金沢先生のいわれたそういう飲ませ方を、内藤先生は、哺乳瓶をくわえさせて飲ませる、ぼっと抜く。——これは注射式授乳方法である。今日の乳児のストレスの最大原因は、ここから始まっているといわれた、ということです。お乳はたっぷり飲むけれども、人間的な愛情の不足です。だから母乳が出ない方はこれはやむを得ませんが、人工授乳の時もやはり、母乳と同じ角度で赤ちゃんを抱き、母乳と同じ角度でミルクを飲ませ、終わってしまっても、話し合いをしながら人間的な暖い交流をしながら育児をしなげりやならんわけです。それが欠けている。これから親子の断絶がもはや始まっちゃうわけです。

その次に今度は、幼児期。幼児期になりましたならば、幼児期は幼児期として充実させなげりやいけない。ここでは乳児期のようにたっぷりかわいがるだけではないけません。かわいがるなんてことは動物的本能ともいえます。だから人間が人間らしく育つためには、人間として大事にしなげればいけない。だからここですつけをはじめるわけです。人間らしく生きる生活技術、基礎的習慣をここから指導しなげりやならんわけです。そしてよく遊ばせること。遊びの生活をたっぷりここでさせるようにしてゆかきなげりやありません。けれども最近の幼児期は、母

親の中にはもう小学校へ上げることばかり考えてる。できたらいい小学校へ、附属小学校のような名門小学校へ上げるためには、どうしたらいいだろうか。そこで知能テストの勉強を始める。あの幼児に入学準備教育をやるようなこういう馬鹿げた母親が非常に多いということです。

これでは幼児期は欠損状況のまま、遊びに対する欲求不満のまま、育ってしまいます。これでは立派な少年になれません。今度は少年期にはいったならば、よく遊びよく遊べを徹底させればいいのに、ここでまた、入学準備教育があるというようなことから、勉強よ勉強よ、勉強しなくちゃだめよ、お友だちと遊びたいだろうけれども、ここで勉強しなげりやだめ。そうしなげりやいい学校にはいけない。いい学校にはいって、いい大卒にはいって、いい所に就職するの。それがあなたの幸せよ。今は辛いかもしれないが、勉強勉強というようになげりや、進学教室へ通わせているような馬鹿な親があります。やがて彼は入試に首尾よく合格して学校へはいった。こういう子どもがどうなるかというところ、おそらくよく努力はするが、利己主義で冷たい人間になっていっちゃう。これは遊びをさせないからです。遊びの中にこそ、人間的な友情が育つ。これをこの子どもたちに体験させないから、利己主義で冷たい人間になってしまふ。

これがもし、国のエリートになったらどうということになるの

でしょうか。今日の官僚の中なんかに、そういうのが相当いるようです。国民のお手本にならなけりゃならん人が、利己主義で自分さえよければいいという、冷たい人間になっている人が、相当多いようであります。どうも教育がですね、つま先で、前かがみで歩いているという現状です。これではまともな人間は育ちません。

◆ 私の求める幼児教育

「ゆっくり芽を出せ柿の種」

そこで幼児期としたならば、私は今のような状況、過熱化された社会的空気の中で、どうしたらいいかということをお願いしたい。

今の社会的ふんいきの中で、どちらかといえば、「早く芽を出せ柿の種。ならぬとはさみではさみ切る。早く木になれ柿の種。ならぬとはさみではさみ切る」というふうに、早く大きくなれ、早く早くというかたです。そういうふうなあせりが見えております。それに商業主義がうまく結びついてしまうわけです。そしてそういうことについての本を出し、いろいろなもの売り始めました。これで人のいいおかあさんたちが、皆頭をさきさき舞いさせちゃつてるといふこと。こういうようなことから犠牲になってゆくの、幼児です。

そこで、それならば幼児期はどうしたらいいか、人間が人間らしくという私の考えの上からいうならば、私は幼児期は「早く芽を出せ柿の種」方式ではなくて「ゆっくり芽を出せ柿の種。しっかり根を張れ柿の種」と、これが私の幼児教育の原則論であります。だから今日の一般社会的ムードとは、全く逆なことを、私は考えているわけであります。しかしこれは、ことさらに逆をいうわけではないのです。私はそれが子どもの育て方として、当然なことであると思うのです。というのは幼児はこの世に生まれて来て、一番自然的です。人間の子どもは、いくら早く産もうとしたってやはり、十ヵ月は母親のおなかになければ生まれません。これはおそらく今から五百年前も、千年前も、今日も全く同じではないかと思えます。

こういう一つの、人間の自然の生まれ方があるわけです。それならば生まれてきた子どもも、自然に育ててやらなきゃならんと思えます。そこで、こんな人間に育てようというのに、物を彫刻するように育てようという、理想の人間像をえがいて育てようという育て方と、それから、どんな人間かわからないが、その出てきた芽、芽を大事に育てる。それがチューリップの芽ならばチューリップに育てる。それが麦の芽ならば、麦として育てる。出てきた芽に応じて育てるといふ、その二つの育て方があると思えます。私はどちらを思うかという私は芽の方

す。出てきた芽の育て方。これを大事に育てたいと思うのです。しかもその芽は、どこで生育するか、その芽のもとになる種はどこにまいてあるかというところ、これは温室やビニールハウスではありません。普通の露地です。普通の土です。自然です。そして出て来た芽、この芽は、太陽とそれから空気と、水というものによって生育してゆくわけです。しかもその芽は時には雨を浴びるでしょう。時にはあらしにあうかもしれない。けれどもその中で生育させなければいけないと思います。

いつか羽仁進さんの奥さんの、左幸子さんとお嬢さんがあるわけですが、泣き方がめめめ泣くから、おあさんの幸子さんは「そんなにめめめ泣かないで、泣く時はわあーっという泣きなさい。」とそういうたそうです。おそらくこのおあさんはめめめ泣くやなくて、わーっという泣く方だと思うのですが……。そういっただら未央ちゃんが「そんなこといって、私はこういう性質なの。人間にはそれぞれ性質があるのよ。私はめめめ泣くのが私の性質よ」と、こいわれてしまつてあとは何もいえなかつたといつておりました。これはあの羽仁説子さんが、よくいわれる言葉ですね。それぞれ子どもには性質がある。ひとりひとり個性があるんだから誰も彼も、同じようにやっつてはいけない、ということをや

くいつておられたんですが、お孫さんもやっぱりそういうことを、もうおばあちゃんの教育から受けておったのか、おあさんにそういうことをいっただけで、笑つてしまつたわけです。

それぞれの性質もあるわけですから、個性に応じた見方をしなきゃならん。そしてその柔らかい芽を育てるには、まず養護の上に立つて育てる。とに角柔らかいということを考えていた。そして知識のことばかり最近考へていよう。

それでは知識だけ引きずり出すわけです。知識を引きずり出せば出ますよ。伸びますよ。早く芽を出せ柿の種と、知識ばかりを引き出そうとして教育しようと思つたら伸びます。一方だけ引きずり出すのではなく、からだも、それから心も一緒に伸びなければいけない。からだと心と知恵の三つが一緒に伸びること、人間の全面発育、調和のとれた発育ができるわけです。

それを一部ばかり伸ばしても駄目です。これはこの間も私の家の、さつきいりました孫が、三年半アメリカにおりまして帰つてきました。そしてその母親が私にいました。その当時、幼稚園の五歳児であつたわけです。向うの幼稚園で。そしてその幼稚園の先生がいわれるには、そのころ、その幼稚園でも知能の高い子だけを別にしまして、教育をしたそうです。そうしたらその子どもたちはたしかにはじめは、他の子どもたちと

は違つて、ぐんぐん伸びてきた。ところがですね、その追跡調査をしていったならば、はじめはぐつと差が出ておつたのに、

一般の子どもとどこで一緒になつたかというところ、一般の子どもが六年生になつた時には、この子たちと同じようになつちやつたというんです。結局ですね、早く知識を注入したに過ぎなかつたということなんです。

そこでもう、その幼稚園、そこは幼稚園と小学校がくっついているんです。もうこの教育は止めましたとこういつているわけです。それから、とび学級をやつたんです。三年生の子どもを勉強ができるからと四年へとばしちやつたわけです。一年とんだわけです。そういうことをやつて技術改新にたえる頭脳開発の教育をやつたわけですが、これも失敗した。というのは一学級上へとんで勉強はできたけれども生活がともなわない。そこでやはりその子は、皆の中から疎外されてしまった。ニューヨークのマンハッタンのある小学校でも、サンフランシスコのある小学校でも、もうやめてしまつておる。これをこの間聞いたわけですが、中教審は今度それをやろうというんです。おかしいですね。知識だけを引き伸ばしてはいけません。心とからだと知恵とこれら三つが、三者一緒になつて伸びるところに人間的な育ち方ができると、こういうふうには思うわけでありません。

◆ 柔らかい芽を育てるには

特に幼児の指導というものの大事なことは、何を幼児期に教えるかという、タイミングが非常に重要なことだと思ひます。私はそのことでここに「砕啄同機」という言葉をご紹介します。これは、さいは砕く、たくは石川啄木の啄、つつくですね。どつは同じ、きは機会です。どういふことかというところ、卵をです。ね、卵を親鳥があたためます。そしてだんだんとある日数がたつてくると、卵の中の雛がからをつきます。そうすると親鳥がからを上からくいただきます。そのタイミングが丁度あつた時が、卵からかえる一番いい時ですね。教育もこうあらなければならぬ。子どもがですね、こつこつこつと内からつつく。それを教師という親鳥、母親という親鳥が、タイミングよく上からくだいてやる。それでパツと卵が割れるわけです。それでピヨピヨ出てくる。こういうようなことが、必要であるということなのです。

そういうように、子どもが求めてくる時をいかにチャンスはずさずに、つついてやるかということね。昨日も私は田口先生あの、言葉の講座に出させていただきましたけれども、お話を聞いておますと、なかなかおもしろいお話がありましたね。いらした方はおわかりと思いますが、つまり幼児が言葉を

覚えてゆくというのは、まわりの者が教えたりすることによって覚えるのではなくて、赤ちゃんの方がですね、こう何かこうさす、そこに犬をこう、うんうんとさす。そうすると母親が、あれはワンワンよとか犬だよと教えることによって言葉覚えてゆくという。丁度子どもがそれを知りたいと表現する。その子供の発動的表現、動きというものを親が知って、そして親が教えることが日本語を、言葉を覚えてゆく最もよい機会であるという、こういうふうには私はそれを理解するわけでありませぬ。その時、特に日本語の場合は、母親が一番その子に教える教える方のよいのは、愛情をもって教えるからここで一層その子どもは、暖い愛情のもとで覚えてゆくことができると思うのです。

また、しつけもしなければなりません、やはりこれもむやみにたくさん押しつけてしまいますと、なかなか子どもはそれを受け付けられないものだと思います。いつでも、その時、その場で何を教えるのがいいかということをも十分考えてやらなければならぬと思います。

その次に申上げたいことは、子どもは常に自然の中で、自然と共に大らかな気持で育ててもらいたい。一番理想的にいうならば、この山や川や水のある、大自然の中で育てるのがいいと思います、今日はそうはいかなくなってきました。もうこの東京の都会の中で、大自然を求めることは無理であります。けれど

も都会の中でもですね、路地もありますし、木登りもできると思いますし、いろいろなことができると思うんです。時間さえ与えてやれば。それと親が危いからよしなさいよしなさいというところで、止めてしまうから子どもはそういうことさえもやる機会を失っちゃう。いつかもテレビを見ておりましたら、一年生の先生が黒板に木の絵をかいた。そして子どもたちに、これは何だと聞いたら木だというんです。この木を見てお前たちはどう思うかと。先生は、予想したことは子どもが木登りノとか、ターザンごっこノ、というかと思つたら「登っちゃいけません。危いから」とこういったというんです。

こうして都会の中でも木登りができるのに、それをさせないような現状になっているからだめなんです。けがをしてもいいんですよ。ここまでいうといい過ぎになるかもしれない。大体、小さな子どもはそう大したけがは致しませんから。私は木登りもさせていいと思います。そういう中で子どもはいろんな事を覚えてゆきます。木に登って落ちた子ども、私なんか落ちた方の部類ですが、一度落ちますと次に木に登る時は非常に用心するものです。一枝一枝に足をかけて、折れないかどうか用心しながら木に登ってゆくものです。そういう体験をさせることもいいですよ。それを先へまわっては、あれもだめ。これもだめ。あれをやっちゃいけない。これをやっちゃいけないというから、

子どもはどうにもできないことになっちゃう。私は最近、交通問題でね、あの黄色の帽子をかぶせ、黄色のランドセルを、黄色の傘を見るといやになっちゃうんです。

いかにもあれは安全のように見えるかもしれないが、果たして安全であるかどうかね。ああいうことに慣れてしまっていないでしょうか。私はそういうことにつきましても、もっともっと生活というものを、子どもの実体に即して考えなくては……と思います。

都会地でも、私は遊ばせたならば大いに遊ばせることができると思います。それからまた、交通問題で危いことは事実ですがしかしそれはやはり教えればいいと思うんです。広い道へ出る時は、右をみて左をみて右を見て、前に進むということを徹底させればいい。それをあまりに過保護にしてしまうと、よそに行った時、一人になった時、それがかえって危くなってしまうということもあると思うのです。

その次に申し上げたいことは、その柔らかい芽を育てる時に是非必要なことは、子どもの感情を大事にするということ。まず、素直な人間感情をもつ子どもに育てたいと思います。特に美しいものに対しては子どもが「おかあさん、きれいなね。先生きれいなね」といったならば、必ず共感してやること。「まあきれいなね」といつて共感してやる。その中から子どもは美しさを感じず

るわけでありませぬ。

子どもがよいことをしたら「まあよかった。先生うれしいわ」と抱きしめてやるということ。これで子どもは、いい事をやってよかったと感ずるわけでありませぬ。だから教師は常に子どもと共感できる。そういう新鮮さをもっていないけりやいけません。もしもそれがなくなった時は、教師をやめるべきです。他の仕事をみつけだすほかはありません。

しかもそれは、それぞれの事物に即して、たとえていうならば、私なんか小さい時、いまでも忘れられませぬのは、母親がよくあちこちへ連れていってくれました。母は仏教信者でしたから、お寺参りによく連れていってくれたわけです。お彼岸のお中日には、前の丘に私をつれてゆきまして、そして西の山に沈む太陽を見せるわけです。私は母と一緒に前の丘へ行きます。お線香持ってこいというからお線香持って行きます。お線香を前に立てて、そして母は西の山に沈む赤赤な太陽を拝んでおるのです。私も母の真似をして拝んでおる。その真赤な太陽を拝んでおるような太陽の美しさというものが、私の印象から永久に離れません。しかもそれは単に太陽という物質ではなくて、そこには宗教的な崇高さ、宗教的なものさへ私は感じとっておるわけです。そして太陽の美しさを、美的感情と、宗教的情操というようなものを感じています。母はそんなつもりで私に教育した

とは思われませんが、私はそれを感じる事ができたわけです。

こう思いますと、子どもの教育は常に物事の事柄に即して、その時その時に立止まっては教える必要が、あると、思います。

あるいは植物を育てる。動物を飼育する。この動物を飼うことによって、自然を愛し、生命を尊重するという事を、必然的に子どもは体験するでしょうし、よい音楽にふれさせること。よい絵画にふれさせること。そしてまたよいお話にふれさせること。特によいお話にふれさせなければなりません。最近の子どもは、テレビや漫画を見るようになりまして、ゆっくりとお話を聞く機会を、だんだんと減らしてきております。けれどもまだ活字の十分読めない子どもたちには、言葉によって是非お話をしてもらいたい。昔々ある所に、おじいさんとおばあさんがあって……というこの日本の民話や、その他の話を十分に子どもにしてやっていただきたい。

こうして美しいものを美しいと感じ、あるいはお話を聞き、あるいは動物を飼って、命の尊さを知り体験し、そしてその中から、豊かな感情、豊かな空想力を育てていく。これがまさに人間的な、ヒューマニズムの基礎となると思うのです。そういうことこそ幼児期のうちにしなければならぬと思います。

次に、すべての人間が、人間らしくと先に申し上げましたが、そういうことを、常に考えたり、指導しなくてはなりません。皆と一緒に、常に皆と一緒に……。そして人の痛みをわが痛みと感ずる。こういうことも感ぜさせなければならぬと思います。単にそれは同情ではなくて、そういうことを感じたならば行動できるような人間、こういうことも小さい時から私は育ててゆくことが必要であると思います。

いつか、ある学校の運動会で、徒競走で子どもがかけついてた。そして低学年の子どものことですが、そのクラスの子どもで、いわゆる頭の弱い子ども、精薄児といわれている子どもがですね、一番その子がおそかったんです。六人だか七人だけかけたら、その子が一番遅れてしまった。ところが、途中で自分の前を走っている子が倒れてしまった。どうしても起き上がれなかったのです。そしてその子は、その精薄児の子はですね、その倒れた子を抱きかかえて、からだをはらってやったりして介抱するわけです。そんな介抱をしてやらなければ自分が先に走って行かれるんだけれども、その子を介抱しておったというんです。私はその子を、倒れた子を追い抜いて行く子どもよりも、そうして立止まってその子を介抱してやったというその心の美しさというものに、感動したわけでございます。そういうふうに、人の痛みもわが痛みと思ひ行動のできるこういう

ようなことが必要ではないかと思うんです。

◆ 「しっかり根を張れ柿の種」

そうしてその次に、もう一つだけ申し上げたいのは、ゆっくり芽を出せのことを今まで申し上げたわけですが、次には、しっかり根を張れということをお願いして私の話を終わりたいと思います。

つまり、さきほどからいっている生命力を育てるといふ、ここにも通ずるわけであります。子どもを大事にすればこそ、その内在している生命力を引き出して育てること。そしてたくましい根元的なエネルギーを幼児の時からも育ててやらなければならぬと思います。柔らかい芽ではあるけれども、それは雨やあらしにも耐えさせなければならぬと思います。そういうことについては、私は、子どもがかわいいからこそ、大事にすればこそ、子どもを突き離して鍛練もしなければならぬと思います。しかし幼児期の鍛練というのは、おとなになった青年期の鍛練とは違います。何分柔らかい芽でありますから、それを十分心に入れた上の鍛練です。やり過ぎてしまうと、完全にだめにしてしまうということがありますから。柔らかい芽を大事にするというのは、その中からひとりひとりの子どもに応じた鍛練をしてゆくことです。

私は自分のことを申し上げて恐縮ですが、小学校へ入学する時、一人でもまいりました。母と一緒に歩いて行くはずでありましたけれどもどうした訳かついてこなかった。たった一人で学校へ行きました。ずいぶんそれがためには苦勞いたしました。先生は「皆さんたちは、自分の名前の書いてある所におすわりなさい」とこう言われたのですが、私は自分の名前が読めませんから、うろうろしておいたら隣りのおばさんが、「あんたここへすわるのよ」と教えてくれてそこへすわったわけですけれども、子どもながらもこう、ちょっと恥ずかしいような、皆、母親が来ているのに自分だけ来ていないというのでちょっと寂しい気持ちがありました。

先生がそれでは明日からの学校の、勉強についてのご注意をしますなんていったらしいのですが、私には何だか、ちんぷんかんぷんでちよっともわからない。こういうようなちよっと寂しい入学をいたしました。ところがその翌日からよかったのです。ぼくは一人で学校へ来たんだというその自信ができて、私が今日いささか、自主独立の人生が渡れたというのは、小学校入学の最初の日、一人で学校へ行っただけということが、どうもその大きな原因になっていると今でも思われてなりません。

その子どもどもに応じて、機会を見ては鍛練してやるということ。私は自分の学校で小さい子どもたちと一緒に、よくプ

ールにはいったものです。私の今までいた学校では、プールは泳ぐ所である。どんなことがあっても泳がなければいけません。遊ぶ所ではありません、という鉄則があるんです。だから小学校卒業までに泳げない子どもには卒業証書を渡しません。とこういうことになっているんです。

そのかわり宿題は一切出しません。夏休みの日誌なんていうものも出しません。何にも出してはならないことになっているんです。あんなものはね、親の気休めと、教師の気休めに過ぎない。夏休みは夏休みとして、夏休みでなければできないことをやらせればいいと思うんです。そういうことから私は、夏休みはプールの泳ぎなさい。学校にはプールがあるんだから、泳がせました。一年生の子どもも泳ぐわけです。そしてプールだけは能力別に分けてあります。一番最初、真白な帽子かぶって、いましてね、浮くことのできた子ども、この子には赤いリボンを与えます。今まで歩くことしかできなかった人間が、浮くことができたということは、からだの上では大革命ですよ。

そこでまず、浮けたということでもリボンを与えます。その次に今度は、小さなプールの幅六メートル泳げた子どもには七級のリボンを与えます。七級の赤い線がきます。それからその次に今度は、十五メートル泳げた子どもには六級の線をやりま

す。二十五メートル五級。五十メートル四級。百メートル、二

百メートル、三百メートル、千メートルとこうなつてゆくわけですけれども、一年生の子どもも、やっぱり一生懸命で、上のお兄さんや、お姉さんが泳ぐから、それを見てから泳ぐわけです。浮けて、次に泳ぎ出すと私も「しっかり頑張れよ。先生も応援してやるからな」なんて一緒にプールにはいります。

子どもは泳いできます。ところがあの子どもの場合ですがね、もうこのくらいという所までくると立止まっちゃってだめなんです。じゃもう一度泳いでこいという、また同じ所で立止まっちゃってしまう。ゴールがこまできてる。もう、ゴール寸前ですと立っちゃうんです。惜しいですね。そこで「お前なあ、今さっきすぐ泳いだからいけないんだ。もう十五分も休んでからおいでよ」とこういったんです。ところが、一年生の子どもには時間の觀念が無いのですから、すぐにまた泳ぎ出しちゃうんです。何とか今度は泳がせたいと思って、私の目の前に来た時、またこのくらいの所に来ましたらね、ゴール寸前五〇センチぐらいの所で、また彼は全然前に進まなくなっちゃってるんです。それでも何とか泳がせたいものだから「頑張れ頑張れ。水を飲んででもいいから頑張れ。死んでもいいから頑張れ」なんて思わず声が出てしまうわけです。

そんな無茶なことも、ついやってしまったわけですが、上から私にどなられているものだから、顔は上げられない。彼は

水を飲みながら夢中になって泳いだわけです。で、やっとプールサイドに手をかけました。見事に彼はゴールに到達したものですから、私は彼を抱き上げた。「よかったよかった」といつて抱き上げてやったんですけれども、少しも喜んでいません。はあはあいつて苦しがつているんです。それでも少したつてから、その六メートル泳いだ七級のリボン、それからあめを一つ彼に与えた時にね、彼ははじめてポロポロポロと涙をこぼして、喜んでるわけです。小さな一年生の子どもが、やっと幼稚園を出て、まだ四ヵ月しかたっていない子ども、その小さな子どもがですね、うれしくて感動して、涙をこぼすということもできるわけです。その次の次の日に廊下でばったり彼に会いましたら、彼が「先生」って私を呼ぶんです。「何だ」っていったら、「ぼく今度ね」五本指を出しましてね、「ぼく今度ね、五級に挑戦する」とこういんです。一年生の子どもが、挑戦するという言葉使うんですね。「そうか頑張れよ」とこういっただんです。

その後夏休みも終わりました。九月になりました。九月の十日過ぎに彼から葉書がまいりました。「先生、ぼくはあれから五級になりました。そして学校が楽しくなりました」といんです。はあ学校が楽しくなった、ちよつとその意味がわかりかねたものですから、担任の先生の所へ持って行って、その葉

書を見せたんです。こんなことをあの子がいつてきましたよといったら、担任の女の先生が「まあ、やっぱりそうでしたか」といいます。担任はすぐわかるんですね。どうしてですかといったら、「実はあの子は勉強のできない子です」すぐあきつぼくて、勉強を投げてしまう子ども。ところが二期期になって、工作をしておったら、少し作ってきて、うまく作れなくなつたら、もうぼーんとなげちゃつた。「ぼくもうやめた」といつて。そしたら隣りにいた女の子が「なんだもうやめるの、五級になつたくせに」そういつたら彼がね「あ、そうか」といつてまたやり直したといんです。それからその後の勉強でも、あきつぼくなつて投げてしまおうとすると、先生がちらつと彼の方に目をむけて「ほらほら五級になつたじゃないの」といふと彼はまたそれで、心をと直して頑張るようになったといふのです。それがもて「やっぱりそうでしたか」といつたその言葉の裏にはね、九月のなかばごろまでには、もう一学期のころとは違つた、彼の目の輝き、勉強への取り組み方が、はっきりと変わったといんです、担任の先生は。

こうして小さな子どもにも、自分を鍛練してゆく、こういうこともできるわけです。だからそのチャンス、われわれはなくしてはいけないと思ふんです。

こうして、ゆつくり芽を出せ柿の種。しっかり根を張れ柿の

種という、そういう根の張らせ方をしてゆきたいと思うのです。風雪に負けない、これからの世の中が、どんな世の中になつてゆくかわかりませんが、その世の中に耐えてゆく人間。しんの強い人間を育てるには、やはりチャンスを見て激励し、共感してそして育ててやらなきゃならぬと思います。

ちよつと今、言葉を前後いたしました。子どもをです、そういう時、自分で頑張り抜いて、自分を克服し、頑張り抜いたというそういう時は、まず共感してください。偉かったとそれこそ抱きしめて「あんたえらかった。よく頑張ったわね」とまず共感してください。その次に今度は激励してください。それによって彼は自信をもち、意欲を身につけるようになります。こうして根を張る教育をしていただきたいと思うわけでありませす。

昔の人は、気は優しく力持ちといたしました。これは昔の人の幼児教育への願望であつたようですね。やはりそれは今私がいふ、芽を育てるといふことと、ゆつくり芽を出せ柿の種、しっかり根を張れ柿の種と、何か共通するような気がするものでございます。

私の幼児教育への求め方というのは、今まで申し上げましたように、人間の尊厳を基本としたところの「ゆつくり芽を出せ柿の種、しっかり根を張れ柿の種」そして昔の人の言葉を借

りるならば「気は優しく力持ち」の人間に育てることが、これがこれからの荒波の中を生きてゆく人間にとって、重要な基礎になるのではないかと思つたから、申し上げたまででございます。

(一九七一年七月 日本幼稚園協会主催講習会より)

